

小学校中学年の「かけっこ・リレー」の授業における 疾走能力向上のための指導プログラムに関する研究

スポーツ文化研究領域

5013A022-4 梶 将徳

研究指導教員：吉永 武史 准教授

＜本研究の背景と目的＞

2008（平成20）年に改訂された小学校学習指導要領（文部科学省，2008a）において指導内容の明確化・体系化が図られた。その結果，小学校学習指導要領においてこれまで小学校低学年および中学年で取り上げられていた「基本の運動」が，同一系統の運動領域へと組み換えられ，技能目標も明確に示された。陸上運動領域の短距離走に関する技能目標は，低学年は「走・跳の運動遊び」を通して「色々な方向に走る」こと，中学年は「走・跳の運動」を通して「調子よく走る」こと，高学年は「陸上運動」を通して「全力で走る」ことが示された。しかしながら，「調子よく走る」や「全力で走る」といった抽象的な表現に留まっているため，教師が授業をする際に学習者である児童に対して何を指導すればよいか不明瞭であると考えられる。また，小学校学習指導要領解説体育編（文部科学省，20008b）に例示として動きの様相が挙げられたが，体育授業を対象とした小学生の疾走動作に関する先行研究が少ないため，疾走動作を習得し得る教材や指導プログラムについての実証的な検討が不十分である。そこで，本研究では，小学校中学年の陸上運動領域に示されている「調子よく走る」ための疾走動作を明確にするとともに，疾走能力の向上を目的とした「かけっこ・リレー」の指導プログラムを作成し，その有効性について検討することを目的とした。

＜各章の概要＞

○第1章

第1章では，疾走動作を体育の授業で指導する必要性を明らかにするとともに，「調子よく走る」ための疾走動作を明らかにした。疾走動作は，走動作から分化・専門化していく動作であるため，その習得には適切な指導が求められる。また，運動技術の習得には，小学校の中学年段階が

適しているともいわれている（宮下，1980）。他方で，陸上運動領域の学習では，既に習得している動作の質を高めることが求められるとも指摘されている（岩田，2012）。また小学校学習指導要領解説体育編の文言からも，中学年の「かけっこ・リレー」では走動作を指導することが求められていると推察されるが，走動作は6歳から7歳までにほぼ完成されることから，中学年段階では疾走動作を指導することが望ましいと考えた。そのため，中学年における「調子よく走る」ための疾走動作を明確にするために，陸上競技の短距離選手特有の疾走動作と小学生の疾走動作について検討を行った。その結果，陸上競技の短距離選手の疾走動作と小学生の疾走動作の類似点として，①体幹をまっすぐに保ちながら前傾させること，②脚を素早く振り戻し，前方に大きく振り出すことが確認された。他方で，腕振りについては，各自の疾走動作に適した腕振りがあると考えられた。従って，「調子よく走る」ための疾走動作を，体幹はまっすぐにしたまま前傾し，脚を素早く振り戻し大きく振り出す動作と捉えることとした。また，学習者の疾走動作を評価する観察的評価基準を作成した。作成した観察的評価基準の妥当性，信頼性，客観性を検討した結果，妥当性 $r=0.60$ ($p<0.01$)，信頼性 $r=0.94$ ($p<0.01$)，客観性 $r=0.80$ ($p<0.01$) を示し，疾走速度とそれぞれ1%水準で相関がみられたことから，本研究では，作成した観察的評価基準を用いることとした。

○第2章

第2章では，疾走能力の向上を目的とした教材を作成し，その教材を基に作成した指導プログラムの有効性について検討した。教材の作成に関しては，教材づくりにおける基本的視点（岩田，1994）や「統一と分化の原理」（岩田，2005，p.51）および「個人的運動の集団化」（岩田，2012，p.29）などを踏まえて，「踏みつけ」，「マント走」，

「ポイントダッシュゲーム」を作成した。これらの作成した教材を基に指導プログラムを作成した。

作成した指導プログラムを、東京都内 A 小学校の 4 年生 1 クラス児童 37 名（男子 20 名、女子 17 名）を対象に検証授業を行った。その際、指導プログラムの有効性を明らかにするために形成的授業評価と期間記録、ならびに指導プログラムの前後に 50m 走を実施した。

その結果、指導プログラムは児童に好意的に受け入れられたものの、マネジメントに多くの時間が費やされたことが確認された。

疾走能力の結果は、クラス全体については、疾走速度が有意に低下し、疾走動作は向上した。また、上位群ならびに中位群については、疾走速度の有意な低下が認められた。疾走動作の項目別の分析結果では、クラス全体については、「体幹」は 1%水準で有意に向上し「下肢」は 1%水準で有意な低下がみられた。

以上の結果から、指導プログラムは疾走能力の向上を保証することはできなかった。また、指導プログラム自体の課題として、マネジメントの削減ならびに認知的学習場面を確保すること、意図的に脚を大きく振り出す教材を作成すること、達成型のゲーム教材を作成すること、学んだことを発揮する場としてリレーを位置付けることの 4 点が挙げられた。

○第 3 章

第 3 章では、前章で挙げた課題を踏まえ、修正した指導プログラムを作成した。新たに作成した指導プログラムを、東京都内 B 小学校の 3 年生 1 クラス児童 36 名（男子 21 名、女子 15 名）、および同小学校 4 年生 1 クラス児童 37 名（男子 21 名、女子 16 名）を対象に実施した。

(1) 2 クラス（3 年生ならびに 4 年生）の結果

疾走能力の結果は、2 クラス全体については、疾走速度は向上し総合動作得点も有意に向上した。上位群ならびに中位群については、疾走速度が向上し総合動作得点は優位に向上した。下位群については疾走速度ならびに総合動作得点が 1%水準で有意に向上した。疾走動作の項目別の分析結果は、2 クラス全体については、全

ての項目で有意に向上し、特に下位群の「体幹」ならびに「下肢」が顕著に増加した。

以上の結果から、指導プログラムは特に疾走速度が低い児童において有効であったといえる。

(2) 3 年生クラスの結果

3 年生クラスの授業では、マネジメントの時間が多く運動学習の時間が少なかった。疾走能力の結果は、クラス全体については、疾走速度はプログラム前後で変化せず、総合動作得点は向上した。上位群ならびに中位群については、疾走速度が低下したが、総合動作得点は向上した。下位群については、疾走速度ならびに総合動作得点が向上した。項目別の分析結果では、特に「体幹」において有意な向上が認められた。よって、修正指導プログラムは一定の成果を得られたといえる。

(3) 4 年生クラスの結果

4 年生クラスにおいても 3 年生クラスと同様にマネジメントの時間が多く運動学習の時間が少なかった。疾走能力の結果は、クラス全体については、疾走速度ならびに総合動作得点が有意に向上した。また、全ての群で疾走速度ならびに総合動作得点が向上し、特に下位群については、疾走速度と総合動作得点のいずれも有意に向上した。項目別の分析結果では、クラス全体として「体幹」ならびに「下肢」が向上し、特に下位群の「体幹」と「下肢」が有意に向上した。よって、修正指導プログラムは有効であったといえる。

○本研究のまとめと課題

本研究で作成した指導プログラムは、特に下位群の児童に対して有効であったといえる。また、疾走能力の低い児童でも、疾走動作の「体幹」が改善された。

しかしながら、検証授業の分析結果からマネジメントの時間が多く運動学習時間が少ないことが確認された。そのため、学習場面の設定や学習課題への取り組み方について検討していく必要があると考えられる。また、疾走速度が低下した群や有意な向上を示さなかった動作項目があるため、より有効な指導プログラムを作成していく必要がある。